武蔵野日曜聖書講筵　―小池辰雄92歳記念―

わがキリスト

――ルカ伝第５章１～26節――

１９９６年２月４日
小池辰雄

無者　神交　いじめ　宗教が燃えている　一切を棄てて　火を地に投ぜん　信じていません
御霊の流れ　栄光は神・キリストに　わが主キリスト

【ルカ５】

1群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、2渚に二艘の舟の寄せあるを見たもう、漁人は舟をいでて網を洗い居たり。3イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて陸より少しく押し出さしめ坐して舟の中より群衆を教えたもう。4語り終えてシモンに言いたもう『深処に乗りいだし、網を下して漁れ』。5シモン答えて言う『君よ、われら終夜、労したるに何をも得ざりき、然れど御言に随いて網を下さん』。6斯て然せしに魚のおびただしい群を囲みて網裂けかかりたれば、7他の一艘の舟におる組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満したれば、舟沈まんばかりになりぬ。8シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』。9これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚のおびただしきに驚きたるなり。10ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言いたもう　11『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』。かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

12イエス或る町に居給うとき、視よ、全身癩病をわずらう者あり。イエスを見て平伏し、願いて言う『主よ、御意ならば、我を潔くなし給うを得ん』13イエス手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言い給えば、直ちに癩病されり。……

17或日イエス教えをなし給うとき、ガリラヤの村々、ユダヤ及びエルサレムより来りしパリサイ人、教法学者ら、そこに坐しいたり、病を医すべき主の能力イエスと偕にありき。18視よ、人々、中風を病める者を、床にのせて担いきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、19群衆によりて担い入るべき道を得ざれば、屋根にのぼり、瓦を取り除けて床のまま、人々

の中にイエスの前に吊り下せり。20イエス彼らの信仰を見て言いたもう『人よ、汝の罪ゆるされたり』21ここに学者・パリサイ人ら論じ出でて言う『瀆言をいう此の人は誰ぞ、神より他に誰か罪を赦すことを得べき』22イエス彼らの論ずる事をさとり、答えて言い給う『なにを心のうちに論ずるか。23「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きて歩め」と言うといずれか易き。24人の子の地にて罪をゆるす権威あることを、汝らに知らせん為に』――中風を病める者に言い給う――『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に往け』25かれ立刻に人々の前にて起きあがり、臥しいたる床をとりあげ、神を崇めつつ己が家に帰りたり。26人々みな甚く驚きて神をあがめ懼に満ちて言う『今日われら珍しき事を見たり』」

●無者

イエス・キリストという方は世界無比です。前にも後にもキリストに比較することのできる人はいません。大変な方です。ところが、そのイエスはある時、何と言われたか。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・30）

「自分は何もできない」

と。だから、私はキリストのことを無者といいます。何ものでもない。

「自分は何もできない」

と言うときの彼の魂の姿は神さまの前に平伏しているわけです。キリストはいろいろな奇蹟を行いました。死人も甦った。何もできない人がおよそ人のできないことをやった。これは全く神さまに全托しているからです。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。私たちは、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言う。そこまでこなければ、本当のクリスチャンではない。キリストと一体になる。自分でなるのではない。

●神交

自分をキリストの中に投げ入れる。あるがまま、だめならだめのまま、傲慢なら傲慢のまま、利口なら利口のまま。全部、そんなものは問題でない。人間のもっている相対的なものを全部問題にしないで、そのままキリストの中に自分を投げ入れる。これが本当の「神交」

なんです。信じ仰ぐ「信仰」ではない。これは

「神・キリストとの交わり。自分を神・キリストの中に投げ入れる」

ということです。何も整える必要はない。あるがまま、だめのまま、傲慢のまま、そのまま全我をキリストの中に投げ入れる。これが本当の神交(しんこう)なんです。

神一切になってしまう。

「我を見し者は父を見しなり」

と、何もできなかったキリストがそう言った。これが神交の本当の姿なんです。だから、我々は

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えるまでは、本当の神交ではない。その時には、自分というものは無い。我なき我なんです。

我々が今たまわっているところのこの事態は、世界中探してもそうはないはずです。我々はキリストの中に自分を投げ入れている。あるいは、キリストに圧倒されている。

「キリストへの投げ入れ、キリストの圧倒」

その現実が本当の神交わりの世界です。

「我を見し者は父を見しなり」

とキリストが言われた。それと同質的に、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と。これは自分を本当にキリストの中に――体裁もへったくれもない――そのまま投げ入れてしまう。そうすると、キリストの力が、光が、愛が、生命がやってくる。

●いじめ

テレビで「いじめ」のことを言っている。情けないね。先生が本当に生徒を愛していれば、ああいうことは起きないはずです。先生の愛が足りない。先生の愛に本当に感激している魂ならば、いじめなんてことは起きないはずです。だから、日本の教育も、結局、教育者自身が神の世界に、本当の福音の世界に入らなければ――お釈迦さんでもいいよ――とにかく、宗教的絶対的なものにぶつかって、そしてそれが魂の世界に燃えてこなければだめなんです。いじめの問題は、先生が子供たちに愛をもって本当に教えていれば、そんなことはなくなる。

「そういうことはよせ」

何のかんのと、いわゆる現象的なことをいくら言ったってだめです、先生自身が本当に愛をもって生徒に接していなければ。今の教育者なんていうのは情けない。本当の世界を持っていないから、教育なんかできるかというんだ。

●宗教が燃えている

棟方志功が、

「自分の中には宗教が燃えている」

と言った。宗教が燃えているようなら本ものです。彼は道元や親鸞を読んだ。どれだっていい。そして彼の中に宗教が燃えた。そういう現実です。

無教会だろうと、教会であろうと、そんなことは何だっていい。

「無教会信仰」

なんて、そんなものはありはしない。教派的な根性がまだ残っているからね。

およそ、そういった教派的なものを乗り越えた大詩人はやはりゲーテです。いい加減なクリスチャンよりも、よほどゲーテの方が本当の世界に入っている。ダンテもそうだ。アッシジのフランチェスコ、ルターも。とにかく、第一級、超一級のご連中はみなそういう絶対界に魂が生きていた。

我々は一人びとりがそういう世界にいなければ、つまらないですよね。そうすると、力がきてしょうがない、楽しくてしょうがないということです。智慧もくる。疲れをしらない人になる。

「ああ、今日は疲れてしまった」

なんて、そういうことがなくなってしまう。眠くはなるよ。皆さんはみな一騎当千だ。

●一切を棄てて

ルカ伝5章にもどります。

8シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下(ひざもと)に平伏(ひれふ)して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』。9これはシモンも偕(とも)に居る者もみな漁(すなど)りし魚のおびただしきに驚きたるなり。

キリストは専門家の漁りの連中が見損なっていることがちゃんと見えている。まぁ大変なひとだね。ペテロが

「全然だめでした」

と言った。ところが、キリストの御言(みことば)に従ってやってみたら、大変な大漁になってしまった。

「主よ、我を去りたまえ。我は罪ある者なり」

なんて言っている、こういう謙遜の仕方はかえってだめなんです。罪ある者だから、いよいよキリストにしがみつかなくては。

もうキリストはちゃんと見えている。専門家が

「いない」

と言っているのに、

「冗談じゃない、ちゃんといるよ」

というわけだ。だから、大漁になって驚いてしまった。

10ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言いたもう　11『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』。

伝道することになるぞ、人助けになるぞと。

かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

もう漁りはやめだ。キリストに従っていく。ここは非常に鮮やかなところだ。

「一切を棄ててイエスに従えり」

という。我々はなかなか一切を棄てない。けれども、なにも今やっていることを棄てることはない。やっていても、そんなものは問題にしないで、やっていること自身が実はキリストに従っているということになる。

質が変わらなくてはだめだ、変質してしまわなければ。変質すれば、本当に棄てたと同じことになる。そしてキリストの栄光を現していく。キリストの栄光を現すような在り方をしなかったら、本当の棄てていることにならない。

●火を地に投ぜん

ソクラテスでもプラトンでも、どんな偉人でもない。イエス・キリストというのは特別なひとです。キリストにはお釈迦さんもかなわない。まだ30歳そこそこのひとだよな。自分は何もできないというひとが、だからこそ、

「我を見し者は父（神）を見しなり」

と言った。

「我は火を地に投ぜんために来れり」

とルカ伝に書いてある。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

「火」とは聖霊のことです。

されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」（ルカ13・49～50）

「私は、受くべき十字架がある。十字架で贖罪の仕事をしてから、十字架で身を棄ててから、今度は甦る。復活したら――お前たち、祈って待っていろ――聖霊を与えるぞ。」

と。キリストは我々に聖霊を与えるためにいらっしゃった。だから、聖霊を本当に受けとらない者はクリスチャンではない。

●信じていません

キリストを信じているのではない。

「私はキリストなんか信じていません」

とはっきり言える。あなた方は、

「私はキリストを信じてなんかいません。彼と一つです。力がきて仕方がありません。絶対に行き詰まりません、何がきても大丈夫です」

とはっきり言えなくてはだめです。これが本当の神交わりの世界です。信じ仰ぐ「信仰」ではだめです、「神交（しんこう）」でなければ。

キリストの言葉も行為もケタ違いな現実です。これが本当の霊的な天国的な現実です。福音書を読んでいて、力が来てしょうがない、生命が来てしょうがないということでなければ、聖書を読んでいることにならない。だから、

「学校の先生たちはとにかく聖書を読め。そして驚け。でなければ、本当の教育はできないぞ」

とはっきり言ってもいいくらいです。

昔よく「聖書研究会」というのがあった。聖書を研究して何になるか。古典として研究するなら、それだけの話だ。研究ではない。身体（からだ）で読む。身読（しんどく）です。日蓮は、

「法華経を身読せよ」

と言った。さすがは日蓮だ。昔の仏教の坊さんでも、第一流、超一流の人はやはり違う。概念なんかにこだわっていない。

●御霊の流れ

11 **『懼（おそ）るな、なんじ今より後、人を漁（すなど）らん』**

あなた方も自ずから伝道せざるを得ない。話していることが自然に伝道になってしまう。私は電車の中で隣の人に福音を説いたことがある。

「あなた、いっぺん聖書を読んでごらんなさい」

なんて言ってね。

聖書一巻に万巻の書はかなわない。聖書は大変な本だ。欧米のあらゆる善き文学の源泉は聖書ですから。ダンテの詩も聖書がなければ書けない。ユゴー、ミルトン、ドストエフスキー、トルストイもそうだ。聖書は真理の源泉です。

聖書を一冊破って、福音書なら福音書だけをポケットの中に入れて電車の中で読んだらいい。それくらいのことをしてもいい。

「12 **イエス或る町に居給うとき、視よ、全身癩（らい）病をわずらう者あり。イエスを見て平伏し、願いて言う『主よ、御意（みこころ）ならば、我を潔くなし給うを得ん』**

13 **イエス手をのべ彼につけて『わが意（こころ）なり、潔くなれ』と言い給えば、直ち**

に癩病されり。」（ルカ５・12～13）

私も実は東北でそれをやったことがある。やはり癩病人です。それからあと幾日かたったら治ってしまった。その病院の牧師さんが驚いていました。

「癩病人に手を按くなんていう人は他に見たことがない。あなたは大変な人ですね」

と牧師さんが驚いていた。こっちから聖霊が流れるから、癩病なんか移らない。御霊の流れが彼の中に入っていくから。それだけの現実がなくて、うっかりやったらだめですよ。「按手」というのはそういうことです。

「キリストが按手すれば、病が片っ端から治ってしまった」

と書いてある。

聖霊の力をいただかなければどうにもならん。聖霊の基いは十字架ですよ。キリストの十字架を本当に受けとらないと。十字架を本当に受けとって聖霊がくるので、十字架がなくて聖霊なんてやっていると、ヘタすると悪霊になってしまう。十字架と聖霊はわけることができません。

●栄光は神・キリストに

中風でも何でも治してしまう。

「17或日イエス教えをなし給うとき、ガリラヤの村々、ユダヤ及びエルサレムより来りしパリサイ人、教法学者ら、そこに坐しいたり、病を醫すべき主の能力イエスと偕にありき。18視よ、人々、中風を病める者を、床にのせて担いきたり、之を家に入れて、イエスの前に置かんとすれど、19群衆によりて担い入るべき道を得ざれば、屋根にのぼり、瓦を取り除けて床のまま、人々の中にイエスの前に吊り下せり。20イエス彼らの信仰を見て言いたもう『人よ、汝の罪ゆるされたり』21ここに学者・パリサイ人ら論じ出でて言う『瀆言をいう此の人は誰ぞ、神より他に誰か罪を赦すことを得べき』22イエス彼らの論ずる事をさとり、答えて言い給う『なにを心のうちに論ずるか。23「なんじの罪ゆるされたり」と言うと「起きて歩め」と言うといずれか易き。24人の子の地にて罪をゆるす権威あることを、汝らに知らせん為に』

キリストは罪をゆるす権威と同時に病をいやす力と両方もっている。

――中風を病める者に言い給う――『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に往け』25かれ立刻に人々の前にて起きあがり、臥しいたる床をとりあげ、神を崇めつつ己が家に帰りたり。26人々みな甚く驚きて神をあがめ懼に満ちて言う『今日われら珍しき事を見たり』」（ルカ５・17～26）

それは珍しいよ。神を崇め、神・キリストに栄光を帰する。我々はみなその角度、その心根でもって、

「栄光は神・キリストにあり。ありがとうございます」
といって、何でもやっていかないとね。

●わが主キリスト

私は大学で遠慮なく福音を語った。伝道してはいけないもヘッタクレもない。福音を語りながら、ドイツ語でも何でもやった。学生はやはり後から感謝してます。どうぞ、皆さんも遠慮なく勇敢にやってください。キリストの真理は遠慮する必要はない。

「はぁ、そういう世界があるんですか」
と、驚かせなければ。全く、
「来たりて見よ」
ということだ。伝道のチャンスはどこにでもあります。いわゆる
「教えよう」
なんていう意識でなくて、おのずから言わざるを得ない告白なんです。告白すると、それが自然に相手の人に何かしらんけれども、違った力が入っていく。遠慮することないですよ、大いにやってください。日本人は遠慮が多くて困る。

私たち一人びとりが
「わが主キリスト！」
と言って、キリストに自分を投げかけると、凄い力がくるし、光はくるし、愛は来るし、生命が来る。それだから、キリストと一つ、一如ということです。